OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	集合的自尊感情研究の概要
Author(s)	松田, 信樹; 稲本, 和子; 小林, 未紀 他
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 61-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第7号（2002年）
Annals of Educational Studies Vol.7

集合的自尊感情研究の概要

松田信樹　稲本和子　小林未紀　宮西智子　元好理恵　福井斉

【要旨】

社会的アイデンティティ理論では、自己概念は個人的アイデンティティと社会的アイデンティティから構成され、人は個人的アイデンティティの肯定性だけではなく社会的アイデンティティの肯定性にも動機づけられると仮定される。よって、集団間状況において人は、肯定的な社会的アイデンティティへの欲求ゆえに外集団より内集団を肯定的に評価すると予測される。肯定的な社会的アイデンティティと集団間差別との関連を集合的自尊感情尺度（Luhtanen & Crocker, 1992）を用いて検討した研究を概観したところ、集合的自尊感情と集団間差別との関連については、一貫した結果が得られていないことが明らかとなった。これは、少なくとも部分的には、集合的自尊感情尺度の抱える問題点に起因すると考察された。集合的自尊感情尺度を改訂するか、あるいは集合的自尊感情の新たな測度を開発する必要があると考えられる。

自尊感情（self-esteem、以下SE）は、社会心理学、人格心理学、臨床心理学など心理学の様々な領域において盛んに研究されてきた。一般にSEは自分自身に対する肯定的あるいは否定的態度と定義される（Rosenberg, 1965）。しかし、SEを肯定的－否定的という水準からのみ把握するのではなく、様々な次元から概念化することで、それまでの研究では明らかにされなかったSEの心理学的意味を明確にできることが共通の認識となりつつある（例えば、Greenierら, 1995; 榎本ら, 2001）。本稿では、様々な次元から概念化されるSEのうち、集合的自尊感情（collective self-esteem、以下CSE）に焦点を当てる。本稿の目的は、第1にCSEの概念的意味を社会的アイデンティティ理論（social identity theory、以下SIT）の観点から明らかにすることである。第2に、CSEという概念を導入することでSIT研究にどのような進展が見られたのかを明らかにすることである。そのために先行研究を概観する。そして第3に、先行研究の概観によって明らかとなったCSE測度の問題点を指摘し、改善策を提案することである。

1．CSEの理論的背景

SITにおけるSE

人は誰でも何らかの集団に所属しており、集団への所属は集団成員の認知、感情、社会的行動に大きな影響を及ぼす（Jackson & Smith, 1999）。例えば、あるスポーツチームに所属しそのチームに同一化している人は、チームの成績を向上させるために他の成員を同一目標を抱く人物と見なし、肯定的感情を抱きそして協調的に行動するだろう。また集団への所属は、時に他の集団に対して敵対的な行動を取らせるという側面も併せ持つ。つまり、集団間関係はしばしば競争的になったり対抗的になったりすると言える。このような集団内現象あるいは集団間現象を包括的に説明する理論として提唱されたのがSIT（例えば、Tajfel, 1982; Tajfel & Turner, 1986）である。

集団間葛藤を説明する理論として登場したSITの中心的概念である社会的アイデンティティは、「集団成員性に基づいた自己概念の側面である。つまり社会的アイデンティティとは、価値的意義や情緒的重要性を伴う社会集団の成員性の観点からの自己定義である（例えば、『我々女性』とか『我々アメリカ人』としての自己定義）」（Turner, 1999, p.8）。言い換えれば、個人の自己概念のうち社会的カテゴリーから派生する部分が社会的アイデンティティである。そしてSITは、人は肯定的な個人的アイデンティティだけでなく肯定的な社会的アイデンティティの達成・維持にも動機づけられると主張する。このような主張に至った背景には、最小集団パラダイム（Hogg & Abrams, 1988, pp.48-51.を参照）に基づく一貫した研究結果がある。

典型的な最小集団実験では、被験者を些末な課題によって一時的な2つの集団に分け（カテゴリー化）、その後、所属集団と個人番号しかわからない他の被験者に対して報酬や得点を配分する課題を行わせる。その際、被験者自身への報酬配分、集団内および集団間の相互作用は禁じられている。つまり集団間差別を引き起こすと考えられるカテゴリー化以外の変数は全て除去され、カテゴリー化の効果だけを検証できる状況が作り上げられる。実験結果は、カテゴリー化が集団間差別の生起の十分条件であることを示すものであった（例えば、Tajfelら, 1971）。例えば、被験者は外集団よりも内集団により多くの報酬を配分したり、外集団と内集団への配分の差をできるだけ大きくしたりするといった差別的行動を示した。すなわち、単なる社会的カテゴリー化が集団間差別を引き起こすことが示されたわけである。

このような実験結果に関するSITの説明の1つに、SEの高揚・維持に対する欲求という観点からの説明がある（Long & Spears, 1997）。前述したように、SITでは自己概念は個人的アイデンティティと社会的アイデンティティから構成されると考えるので、肯定的な社会的アイデンティティの達成・維持は自己概念の肯定性（SE）に寄与することになる。加えて、人はSEの高揚・維持に動機づけられている。それゆえに人は集団間状況では、外集団よりも内集団を肯定的に評価することで社会的アイデンティティの達成・維持とそれに伴うSEの高揚・維持に動機づけられるというわけである（Shermanら, 1999）。つまり、最小集団実験における被験者は、振り分けられたカテゴリーから社会的アイデンティティを引き出しており、加えて肯定的な社会的アイデンティティの達成・維持に動機づけられているゆえに、集団間差別行動を示すと解釈される。このようにSITでは、集団間差別の生起過程においてSEの果たす役割を重視するが、これに関してAbrams & Hogg（1988; Hogg & Abrams, 1990）は集団間差別とSEとの関連について2つの系から成り立つ「SE仮説」にまとめている。

> 系1：成功裏の集団間差別は社会的アイデンティティを高め、ひいてはSEを上昇させる。
> SEは従属変数であり特定の形の集団間行動に従事した結果である。
> 系2：SEが低下したりあるいは脅威にさらされたりすると、SEへの欲求ゆえに、集団間差別が
> 引き起こされる。SEは独立変数であり特定の形の集団間行動の原動力である。
>
> （Hogg & Abrams, 1990, p.33）

SE仮説はこれまでに多くの実験によって検証が試みられてきた。ここで、SE仮説の検証結果を評価する際に重要な視点は、各研究がSEをどのように概念的そして操作的に定義しているかという点である。一般にSEといえば個人的自尊感情（personal self-esteem、以下PSE）として概念化されることが多く、測度として最も頻繁に使用されるのはRosenberg（1965）のSE尺度である。SE仮説の検証に際しても同様で、SEをPSEとして概念化しRosenbergの尺度によって操作的に定義する研究が数多く見受けられる（例えば、Seta & Seta, 1992）。実際に、SE仮説の系2に関する先行研究をレビューしたAbersonら（2000）によると、レビューした研究の61.8%がSEをPSEとして概念化し、そのうちの50.4%がRosenbergの尺度によって操作的に定義していた。

近年、SEを様々な次元から概念化する研究者が増えてきている。SEを特性的－状態的次元から捉える立場（例えば、Heatherton & Polivy, 1991）、意識的－非意識的次元から捉える立場（例えば、Greenwald & Banaji, 1995）、そして個人的－集合的次元から捉える立場（例えば、Luhtanen & Crocker, 1992）などがその例である。その中でも、SITのSE仮説と最も関わりが深い次元は個人的－集合的次元である。なぜならPSEとCSE[1]との区別は、SITにおける個人的アイデンティティと社会的アイデンティティとの区別に対応しているからである（Rubin & Hewstone, 1998）。つまり、個人的アイデンティティの肯定性はPSEに、そして社会的アイデンティティの肯定性はCSEに相当する。元来SITは、集団行動を個人の属性で説明する還元主義に対する批判を背景として発展してきた理論であり、個人的アイデンティティよりも社会的アイデンティティに焦点を当てている（Hogg & Abrams,1988）。加えてAbrams & Hogg（1988）が指摘するように、SITが社会的カテゴリー化と集団間差別行動とのつながりを説明する際に言及するSEとは、全般的で個人的なSEではなく、顕現化している社会的カテゴリーに基づいた特殊的なSEである。ゆえにSE仮説の検証においては、SEをPSEとしてではなく、社会的アイデンティティに基づいたSE、すなわちCSEとして

定義するのがSITの仮定に一致する（Long & Spears, 1997; Turner, 1999）。さらにAbrams & Hoggの指摘に従えば、CSEの中でも、全般的なCSEではなく実験状況において顕現化している社会的カテゴリーに基づいた特殊的なCSEとして定義するのが適切である。

CSE

Luhtanen & Crocker（1992）は、それまでのSE研究がPSEに偏っておりCSEを考慮することに失敗していると指摘した上で、CSEの尺度化を試みた。彼女らはCSEを自らの属する社会集団に置かれる価値感情と定義し、それぞれ4項目を含む4つの下位尺度から構成される集合的自尊感情尺度（Collective Self-Esteem Scale, 以下CSES）を作成した。第1の下位尺度は「成員性評価」と命名される尺度で、これは社会集団の成員としての自らの価値を測定する。この下位尺度はLuhtanen & Crockerも認めるように、社会的アイデンティティの肯定性を測定するというより、SEの個人的側面を測定するものと解釈した方が良い。よって、「成員性評価」尺度でCSEを測定することは、CSEの概念的定義と操作的定義との齟齬をきたすことになると考えられる。第2の下位尺度は「私的なCSE」と命名される尺度で、これは自らの属する社会集団の良さについての評価を測定する。この下位尺度は、SITにおける社会的アイデンティティの肯定性という概念と最も一致している（Rubin & Hewstone, 1998）。第3の下位尺度は「公的なCSE」と命名される尺度で、これは他者が自らの属する社会集団をどのように評価しているかについての判断を測定する。第4の下位尺度は「アイデンティティへの重要性」と命名される尺度で、これは自己概念に対する集団成員性の重要度を測定する。この下位尺度は集団同一化の諸尺度（例えば、Brownら, 1986; Hinkleら, 1989; Kelly, 1988; Karasawa, 1991）と内容的に類似しており、「成員性評価」尺度と同じく、CSESの下位尺度に含めるには疑問が残る。CSESの下位尺度の問題点については後に詳しく論じることにする。

Luhtanen & Crocker（1992）はCSESを作成するにあたって、CSEにもPSEと同じく比較的安定した個人差があると仮定し、CSESを特性としてのCSEを測定する尺度とした。ゆえにCSESでは、性、人種、宗教、国籍、民族、居住地域、社会経済的地位など様々な属性集団の成員性に基づく全般的なCSEを測定するように教示を与えられる。Luhtanen & Crockerは達成集団ではなく属性集団に基づくCSEを測定する理由として、達成集団の成員性は個々人に特異的すぎる、達成集団の成員性に基づくCSEにはPSEが混入する危険がある、といった点を挙げている。しかし、CSESの実際の使用例を見ると、被験者自身によって選択された社会集団に基づくCSEの測定（例えば、Luhtanen & Crocker, 1992, 研究3）、性に基づくCSEの測定（例えば、Smith, 1999）、居住地域に基づくCSEの測定（例えば、Jackson & Smith, 1999, 研究2）、達成集団の成員性に基づくCSEの測定（例えば、Maassら, 1996, 実験1）など、研究目的に応じて適宜改訂して使用されることが多いようである。

2．CSEに関する実証研究

CSEと集団間差別

ここでは、SITのSE仮説をCSE尺度を用いて検証した研究を概観する。その際、まず系1を検証した研究から概観を始め、その後、系2に関する研究を概観する。そして最後に系1と系2を同時に検証した研究について概観する。

SE仮説－系1の検証：Chin & McClintock（1993, 実験2）は、集団間差別行動後のSEの上昇を社会的価値理論の観点から説明するための実験を行った。社会的価値理論では、人は向社会的価値志向を持つ者と競合的価値志向を持つ者に大別され、得点配分に際しては、向社会的な者は外集団と内集団の差をより小さく、そして競合的な者は差をより大きくすると仮定する。そして個人の持つ社会的価値志向と一致する集団間行動がSEを上昇させるとの仮説を立て、最小集団実験で検証した。予め向社会的か競合的かを測定された被験者は内集団と外集団にカテゴリー化された後、得点配分課題を課せられた。得点配分に際しては、公正な配分を強いられる群、差別的な配分を強いられる群、自由な配分を許される群、カテゴリー化も得点配分課題も受けない統制群の4条件が設定された。得点配分課題の後、被験者はCSESに回答した。

CSES得点を従属変数とした分散分析の結果、社会的価値理論の予測に反して、社会的価値志向（2）×得点配分方法（4）の交互作用は認められなかった。つまり競合的か向社会的かに関わりなく、差別的な配分を強いられた群のCSES得点が公正な配分を強いられた群や統制群のCSES得点よりも高いという結果が得られた。これは、個人の社会的価値志向に関わりなく、集団間の差別的行動がSEの上昇をもたらすことを示しており、系1を支持する結果と解釈できる。

Gagnon & Bourhis（1996）は、被験者をランダムにカテゴリー化した後に、内集団と外集団に対する得点配分課題を課した。そして得点配分課題の終了後、内集団への同一化の程度（1項目）と社会的アイデンティティの肯定性（5項目）を測定した。回帰分析の結果、集団間差別は社会的アイデンティティの肯定性を有意に予測することが見出された。これは一見するとSE仮説の系1を支持する結果と解釈できる。ただし、集団間差別と社会的アイデンティティの肯定性との関連は、内集団への同一化の程度が高かった被験者においてのみ認められることを示す結果も同時に得られていることから、Gagnon & Bourhisの実験は系1を部分的に支持するものと解釈するのが適当であろう。

SE仮説－系2の検証：Crocker & Luhtanen（1990）は、個人の価値が脅威にさらされた時に自己高揚的な反応をするのはPSEが低い者ではなく高い者である（例えば、Taylor & Brown, 1988）との知見を踏まえて、内集団の価値が脅威にさらされた時に内集団を高揚するような方法で反応するのはCSEが低い者ではなく高い者であろうという仮説を立てた。この仮説は、CSEが高い者ではなく低い者が集団間差別行動に動機づけられることを予測する系2とは相反するものである。些末な課題によって2つの集団に振り分けられた被験者は、CSESの「私的なCSE」尺度に回答した後、グループ課題を課せられた。内集団の価値への脅威はグループ課題へのフィードバック（平均点以上か平均点以下か）によって操作された。その後被験者は、同じ課題で平均点以上の者と平均点以下の者に対する評価を求められた。分析の結果、CSEが高い者においては、内集団の価値への脅威の有無によって平均点以上の者と平均点以下の者に対する評価の仕方を変えることが見出された。つまり、グループ課題で成功した集団の成員は、同じ課題で成功した者への評価を肯定的にすることで間接的に内集団の価値を高揚し、逆にグループ課題で失敗した集団の成員は、同じ課題で失敗した者への評価を肯定的にすることで間接的に内集団の価値の低下を防ぐという方略を採用した。一方、CSEが低い者においては、内集団への脅威の有無に関わらず平均点以上の者が肯定的に評価された。これらの結果は、Crocker & Luhtanenの仮説を支持するものであり、内集団の価値への脅威が与えられた時に内集団を高揚しようとするのは、CSEが低い者ではなく高い者であると結論付けられた。

Crocker & Luhtanen（1990）の結果に関して、Long & Spears（1997）は批判を加えている。それによると、Crocker & Luhtanenの従属変数は「間接的」集団高揚しか測定していないので、CSEと内集団バイアスとの「直接的」関連については何ら語っていないと言う。また、Crocker & Luhtanenが採用したCSESは、様々な属性集団全般に基づくCSEを測定しているので、そのような全般的なCSEは最小集団実験における集団とはつながりがないと批判し、実験場面で顕現化している集団に基づいた特殊的なCSEを測定するべきだと主張する。そしてLong & Spears（1998）は以下のような実験を行っている。被験者は、学生という社会的カテゴリーに基づいたCSEとPSEを測定された後、集団ブレーンストーミング課題を課せられた。その後被験者は、内集団の回答と外集団の回答を評価するように求められた。すなわち要因計画は、2（PSE; 高vs.低）×2（CSE; 高vs.低）×2（評価対象; 内集団vs.外集団）である。分析の結果、PSEと評価対象との交互作用が有意であり、PSEが高い者は外集団の回答より内集団の回答を高く評価した。また、PSEが高い者は低い者より内集団を高く評価した。CSES総得点の効果は認められなかったが、CSESの下位尺度ごとに検討すると、「公的なCSE」と評価対象との交互作用が有意となった。下位検定の結果、「公的なCSE」が低い者は外集団よりも内集団を高く評価することが示された。これらの結果は、SEを個人的水準で定義すれば系2は支持されないが、SEを集合的水準の公的側面から定義すれば系2は支持されることを示している。

SE仮説－系1と系2の同時検証：言語的集団間バイアス（linguistic intergroup bias）[2)]の生起過程を検討したMaassら（1996）の実験1では、系1のみを支持する結果が得られている。その実験ではハンターと環境保護論者を対象として、ハンター集団（あるいは環境保護論者集団）に対する脅威の操作をした後、内集団および外集団に対する言語的集団間バイアスが測定された。CSESの「私的なCSE」尺度と「アイデン

ティティへの重要性」尺度が、半分の被験者には脅威操作前に（実験前のCSE)、残りの半分の被験者には言語的集団間バイアス測定後に（実験後のCSE）施行された。実験の結果、内集団が脅威にさらされた時に言語的集団間バイアスはより顕著に表れることが確認された。さらに言語的集団間バイアスは実験前のCSEとではなく実験後のCSEと有意な正の相関を示すこと、そして内集団が脅威にさらされた被験者においてはCSEが実験前より実験後の方が有意に高いことも確認された。しかし、スイス在住の北イタリア人と南イタリア人を対象としたMaassらの実験2では、言語的集団間バイアスは実験前の北イタリア人あるいは南イタリア人としてのCSE、実験後のCSEいずれとも有意な相関を示さず、系1と系2はいずれも支持されなかった。

Branscombe & Wann（1994）はアメリカ人を対象とした次のような実験を行った。予めアメリカへの同一化の程度を測定されていた被験者（高-同一化vs.低-同一化）は、アメリカ人ボクサーとロシア人ボクサーの試合のビデオ視聴によって内集団への脅威を操作された（脅威 vs.非脅威)。つまり脅威群はアメリカ人ボクサーが敗退する試合を、非脅威群ではアメリカ人ボクサーが勝利する試合を視聴した。ここで、CSESの「私的なCSE」尺度の4項目中２項目が施行された（事前得点)。次に被験者はロシア人を含む様々な外集団を非難する機会を与えられた。そしてCSESの「私的なCSE」尺度の残り２項目が施行された（事後得点)。実験の結果は、系1と系2いずれも部分的に支持するものであった。まず系1に関して、ロシア人への非難得点の中央値で被験者を二分し、それぞれについてCSESの事前得点と事後得点の変動が検定された。その結果、脅威条件では高非難群が低非難群よりも事前得点から事後得点にかけて有意に得点が上昇したのに対し、非脅威条件ではそのような変動は認められなかった。次に系2に関して、高-同一化群においては脅威条件と非脅威条件とで事前得点に有意差があり、アメリカへの同一化が高い者はアメリカ人ボクサーが敗戦するのを見ることによってCSEが低下した。しかし、低-同一化群ではそのような低下は見られなかった。さらに、高-同一化群においては脅威条件と非脅威条件とでロシア人に対する非難得点に有意差があり、アメリカへの同一化が高い者はアメリカ人ボクサーが敗戦するのを見るとロシア人に対してより非難的態度を示した。しかし、低-同一化群ではそのような差は見られなかった。これらの結果は、系1そして系2を支持する結果ではあるが、CSEと集団間差別との関連には内集団への同一化と内集団への脅威という2つの変数が緩衝要因として機能することも示している。

SE仮説の問題点

CSEと集団間差別との関連をSE仮説に基づいて概観してきたが、系1および系２いずれに関しても研究結果は一貫しないようである。とりわけ系2に関しては互いに矛盾する結果が多く報告されている（例えば、Hogg & Mullin, 1999)。先行研究の結果が一貫しない理由には、集団間差別の測度が統一されていないことも挙げられる（Abersonら, 2000）が、SEをめぐる問題も大きく分けて2つあると考えられる。

まずSE仮説の予測内容そのものに関連する問題である。系1および系2ともに1つの独立変数と1つの従属変数からなる極めて簡素なモデルである。しかし集団間差別が生起する過程には、CSEだけでなく2つの集団が組み込まれている状況（競合的か調和的か)、脱個人化など様々な変数が絡んでいると考えられる（Jackson & Smith, 1999)。実際に、Branscombe & Wann（1994）の研究では、脅威にさらされたSEが集団間差別を引き起こす過程において、内集団への同一化と内集団の価値への脅威という2つの変数が緩衝要因として機能することが示されている。このことからSE仮説、とりわけ系2は、様々な関連する変数を含めたより精緻な因果モデルに書き換えられるべきであろう。

次にSEをいかに定義するかという問題である。SITの観点から言えば、SEは個人的水準からではなく集合的水準から概念化されるべきであるのは先述した通りである。しかし、実際にはLong & Spears（1998）の実験結果から見てとれるように、PSEも集団間差別の規定因の１つであることは確かなようである。PSEが集団間差別の規定因になるかどうかを決定する要因の1つは、集団への同一化の程度ではないだろうか。もし集団同一化の程度が高ければ個人的変数の社会的行動に対する影響力は減少するのかもしれない（Chin & McClintock, 1993)。SE仮説を検証する際にCSEとPSEをいかに区別するのが適当かについては不明確なままである。また、CSEをいかに定義するかという問題もある。社会的アイデンティティの肯定

性としてのCSEは、自らが所属する社会集団を肯定的に評価する程度と概念的には定義されるべきであり（Long & Spears, 1998）、実際そのような定義を採用する研究者は多い（例えば、Bettencourt & Dorr, 1997）。しかし個々の研究者がCSEをどのように操作的に定義しているのかを詳細に検討すると、研究者によって強調する点が異なるようである。例えば、Crocker & Luhtanen（1990）の実験では、CSEはCSESの「私的なCSE」尺度によって操作的に定義されているし、Maassら（1996）の実験ではCSESの「私的なCSE」尺度と「アイデンティティへの重要性」尺度によってCSEは操作的に定義されている。このように一口にCSEといっても、各研究者によって操作的定義の仕方に相違がある。CSEの測定方法が統一されていないことも、SE仮説の検証結果が一貫しない理由の1つになっていると考えられる。

3．CSEの測定論上の問題点と提案

集団同一化とCSEとの区別

集団同一化は個人が社会集団のメンバーであると見なす程度だと定義される（Brownら, 1986）ので、社会的アイデンティティの認知的側面だと言える。一方、CSEは個人が同一化した社会集団に置かれる価値感情だと定義される（Luhtanen & Crocker, 1992）ので、社会的アイデンティティの評価的・感情的側面だと言える。つまり集団同一化とCSEは社会的アイデンティティの異なる側面ということになる。しかし、集団同一化の諸尺度（例えば、Brownら, 1986; Hinkleら, 1989; Karasawa, 1991）には社会的アイデンティティの評価的・感情的側面を測定すると考えられる項目が含まれており、またCSESにも社会的アイデンティティの認知的側面を測定すると考えられる「アイデンティティへの重要性」下位尺度が含まれている。さらには、集団同一化の測度としてCSESを用いる研究も見受けられる（Bettencourt & Hume, 1999）。このように集団同一化の諸尺度やCSESには、社会的アイデンティティの認知面を測定する項目と評価・感情面を測定する項目が混在している。確かに、集団同一化とCSEは社会的アイデンティティという概念を構成する主要な成分であるので、両者は相関関係にあることが予測される。実際に、Jackson & Smith（1999）は、集団同一化の諸尺度とCSESとの間に中程度の正の相関関係を見出しており、集団同一化とCSEは内集団への魅力という高次因子にまとめることが可能だとする。しかし、集団同一化とCSEは相関関係にあるとしても、両者は別概念であり明確に区別されるべきである（Ellemers & van Knippenberg, 1999）。内集団への同一化は集団間差別行動を引き起こすが、肯定的な社会的アイデンティティは集団間差別行動を引き起こさないというSITの予測を検証する際には、集団同一化とCSEを概念的にも操作的にも区別する重要性が一層強調されなければならないだろう（Rubin & Hewstone, 1998）。脅威にさらされたCSEが集団間差別行動を引き起こすという因果関係には、内集団への同一化の程度が緩衝要因として作用することを実証したBranscombe & Wann（1994）やGagnon & Bourhis（1996）の研究は、集団同一化とCSEとを区別することの重要性を証明している。

CSESの問題と新しいCSE測度の開発に向けて

ここでは、社会集団に置かれる価値感情を測定することを企図して作成されたCSESの問題点を4つ指摘したい。まず第1に「成員性評価」尺度についてである。集団成員としての自己評価の高さとCSEの高さを同時に有することは多いと考えられる。実際に「私的なCSE」や「公的なCSE」と「成員性評価」との間には正の相関が認められている（Luhtanen & Crocker, 1992）。しかし、「成員性評価」はCSEと同義でないと思われる。「成員性評価」をCSEの下位概念として含める場合、CSESが測定する概念はCSEそのものから拡散する可能性がある。「成員性評価」には、集団の中の一員としての自己認知という社会的アイデンティティの認知的側面が前提にあることは了解できるが、項目内容は個人的能力の評価を測定するものである。よって「成員性評価」尺度はCSESが測定を企図する社会集団に置かれる価値感情としてのCSEよりも、個人的水準のSEを測定することになるだろう。PSEは全般的PSEと領域を限定した特殊的PSEという2つの側面に分けられるが、「成員性評価」尺度は、集団生活におけるPSEという特殊的PSEの概念を測定すると考えられる。つまり「成員性評価」尺度は、集団内における個人の価値感情を測定するものだ

と言える。このような理由により、「成員性評価」尺度はCSESの下位尺度として含めるのではなく、CSEとは別の概念を測定するものとして扱うことを提案したい。第2に、「アイデンティティへの重要性」尺度についてである。この下位尺度は、自らの属する社会集団への肯定的評価・感情というより集団同一化の程度に関わる尺度だと思われる。すなわち、社会的アイデンティティの肯定性という評価的・感情的側面というより認知面を測定すると言える（Lay & Verkuyten, 1999）。その根拠として、「アイデンティティへの重要性」尺度はPSEの尺度との間にほとんど有意な相関が認められないという研究結果が報告されている（例えば、Crockerら, 1994; Verkuyten & Lay, 1998）。加えて、先述したように、CSEと集団同一化は別概念として扱われるべきだと考えられるので、「アイデンティティへの重要性」尺度を「私的なCSE」尺度や「公的なCSE」尺度と同時に施行してそれらの合計点でCSEを操作的に定義するのは適切でない。「アイデンティティへの重要性」尺度も、「成員性評価」尺度と同様に、CSESに含まない方が望ましいと主張したい。第3に、CSESは元来、様々な属性集団全般に基づくCSEを測定する尺度だという点にまつわる問題である。人は同時に様々な社会集団の成員であるので、ある1人の回答者が集団Aに置く価値感情と集団Bに置く価値感情が同一である保証はない。また、属性集団全般に基づいたCSES得点が、個人が所属するあらゆる社会集団に置かれた価値感情の平均的水準を表すという根拠も示されていない。ゆえに、属性集団全般に基づくCSES得点が何を測定しているのかは、回答者がどのような社会集団を想定してCSESに回答したのかに依存すると見なすのが適当だろう。要するに、CSESが属性集団全般に基づくCSEを測定すると言っても、本当に全般的なCSEを測定しているかどうかは疑わしいと考えられる。CSESは属性集団全般に基づくCSEを測定するために用いられることもあれば、性や民族あるいは人種など特定された属性集団に基づくCSEを測定するためにも用いられる。さらには、達成集団に基づくCSEを測定するためにも用いられる。そのように異なる社会集団に基づいて測定されたCSES得点を、CSEとして同列に扱うには無理がある。仮にCSESが属性集団全般に基づくCSEを測定し得るとしても、全般的CSEと特定の属性集団に基づくCSE、そして達成集団に基づくCSEが同じ内包的構造を有しているかどうかは明らかでない。言い換えれば、想定する社会集団が異なってもCSESの因子構造が同一であるという根拠は示されておらず、教示文と項目内容を変更することで、CSESを特定の属性集団に基づくCSEの測度に改訂したり、達成集団に基づくCSEの測度に改訂したりする手続きが妥当かどうかは明らかでない。また、Long & Spears（1997）が指摘するように、全般的なCSEを測定するCSESは、SITのSE仮説を検証する上で有用な測度と言えない。例えば、自民族に基づくCSEが他民族への差別的行動を引き起こすというSE仮説の系2に関する予測を検証する際には、社会集団全般に基づくCSEではなく、自民族に基づいた特殊的なCSEの測度を用いるのが適切なのは明らかであろう。つまり実験状況において顕現化する社会集団に基づいたCSEの測度が必要になるわけである。そして第4に、CSESは特性的なCSEの測度であることから生じる問題である。特性的CSEを測定することは、SE仮説の系1を検証する際に問題となる。系1は、成功裏の集団間差別行動がSEを上昇させることを予測するのは先述した通りである。つまり系1におけるSEは、時間的に安定した特性的SEではなく、状況に応じて変化する状態的SEとして概念化されるべきである。このような観点から見て、特性的なCSEを測定するCSESは、SE仮説を検証する測度としては有用でないと言える。

以上をまとめると、CSESの一般的な問題点は「成員性評価」尺度と「アイデンティティへの重要性」尺度を下位尺度として含めていること、全般的なCSEを測定するように教示や項目が作成されていることである。そして、SITのSE仮説を検証する測度という点から見れば、特性的なCSEを測定するように構成されていることもCSESの抱える問題点となる。これらの問題点を解決するために、今後、社会集団を特定化した上で、PSEや集団同一化とは明確に区別されたCSEの測度を開発することが望まれる。さらにSE仮説の検証にあたっては、特殊的かつ状態的なCSE測度を作成することも必要となるだろう。

本稿では、SITから派生してきたCSEという比較的新しい概念の意味を明らかにし、CSEという概念を導入することでSIT研究にいかなる進展が見られたのかを検証することを目的として論を進めてきた。紙面の都合上、CSEに関する先行研究を網羅することはできなかった。特に、CSEと精神的健康との関連については有意義な知見が得られてきたにもかかわらず、それらに言及することはできなかった。また、

SE仮説の検証結果についてもその全てを取り上げることはできなかった。しかし、PSEではなくCSEという概念をSIT研究に導入したことで、初めてSITが言及する社会的アイデンティティの肯定性としてのSEに相当する概念が整備されたのは確かである。SITのSE仮説をより精緻化するとともに、既存のCSE測度の問題点を克服するCSESの改訂版、あるいは新たな尺度を作成することが急務と言えよう。

【註】

1）社会集団や社会的カテゴリーの成員性に基づく自己概念の部分に言及する際に、ヨーロッパの社会心理学者らは社会的アイデンティティという用語を用いるが、アメリカ式の用語法では一般に集合的アイデンティティと呼ばれ、アメリカ式の用語法で社会的アイデンティティと呼ばれるのは対人領域における自己に言及するものである。つまりヨーロッパに起源を持つSITで用いられる個人的アイデンティティはアメリカ式の用語法でも同じく個人的アイデンティティと呼ばれるが、SITで用いられる社会的アイデンティティはアメリカ式の用語法では集合的アイデンティティと呼ばれる。本稿では、社会集団や社会的カテゴリーの成員性に基づく自己概念の部分に言及する際には社会的アイデンティティという用語を、社会集団や社会的カテゴリーの成員性に基づく自己概念の肯定性については集合的自尊感情（CSE）という用語を用いる。

2）言語的集団間バイアスとは、Maassら（1996）によると、内集団の肯定的行動や外集団の否定的行動は状態動詞や形容詞といったより抽象度の高い言葉で、そして内集団の否定的行動や外集団の肯定的行動は記述動詞や解釈動詞といったより抽象度の低い具体的な言葉で記述される傾向のことである。抽象度の高い言葉で記述することは観察された事象が対象集団の一般的イメージを維持するのに役立つのに対し、抽象度の低い具体的な言葉で記述することは観察された事象から対象集団全体への一般化を防ぐのに役立つと考えられる（唐沢, 2001）。

【引用文献】

Aberson, C. L., Healy, M., & Romero, V. 2000 "Ingroup bias and self-esteem: A meta-analysis." *Personality and Social Psychology Review*, 4, 157-173.

Abrams, D., & Hogg, M. A. 1988 "Comments on the motivational status of self-esteem in social identity and intergroup discrimination." *European Journal of Social Psychology*, 18, 317-334.

Bettencourt, B. A., & Dorr, N. 1997 "Collective self-esteem as a mediator of the relationship between allocentrism and subjective well-being." *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 955-964.

Bettencourt, B. A., & Hume, D. 1999 "The cognitive contents of social-group identity: Values, emotions, and relationships." *European Journal of Social Psychology*, 29, 113-121.

Branscombe, N. R., & Wann, D. L. 1994 "Collective self-esteem consequences of outgroup derogation when a valued social identity is on trial." *European Journal of Social Psychology*, 24, 641-657.

Brown, R., Condor, S., Mathews, A., Wade, G., & Williams, J. 1986 "Explaining intergroup differentiation in an industrial organization." *Journal of Occupational Psychology*, 59, 273-286.

Chin, M. G., & McClintock, C. G. 1993 "The effects of intergroup discrimination and social values on levels on self-esteem in the minimal group paradigm." *European Journal of Social Psychology*, 23, 63-75.

Crocker, J., Luhtanen, R. 1990 "Collective self-esteem and ingroup bias." *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 60-67.

Crocker, J., Luhtanen, R., Blaine, B., & Broadnax, S. 1994 "Collective self-esteem and psychological well-being among white, black, and Asian college students." *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 503-513.

Ellemers, N., & van Knippenberg, A. 1999 "Stereotyping in social context." In R. Spears, P. J. Oakes, N. Ellemers, & S. A. Haslam (Eds.), *The social psychology of stereotyping and group life*. (pp.208-235). Oxford: Blackwell.

榎本博明・稲本和子・松田信樹・梅垣武　2001　「自尊感情に関する概念的検討」『大阪大学教育学年報』6, 141-150.

Gagnon, A., & Bourhis, R. Y. 1996 "Discrimination in the minimal group paradigm: Social identity or self-interest?" *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 1289-1301.

Greenier, K. D., Kernis, M. H., & Waschull, S. B. 1995 "Not all high (or low) self-esteem people are the same: Theory and research on stability of self-esteem." In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp.51-71). New York: Plenum.

Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. 1995 "Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes." *Psychological Review*, 102, 4-27.

Heatherton, T. F., & Polivy, J. 1991 "Development and validation of a scale for measuring state self-esteem." *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 895-910.

Hinkle, S., Taylor, L. A., Fox-Cardamone, D. L., & Crook, K. F. 1989 "Intragroup identification and intergroup differentiation: A multicomponent approach." *British Journal of Social Psychology*, 28, 305-317.

Hogg, M. A., & Abrams, D. 1988 *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes.* London: Routledge.

Hogg, M. A., & Abrams, D. 1990 "Social motivation, self-esteem, and social identity." In D. Abrams, & M. A. Hogg (Eds.), *Social identity theory: Constructive and critical advances* (pp.28-47). New York: Springer-Verlag.

Hogg, M. A., & Mullin, B. A. 1999 "Joining groups to reduce uncertainty: Subjective uncertainty reduction and group identification." In D. Abrams & M. A. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition* (pp.249-279). Oxford: Blackwell.

Jackson, J. W., & Smith, E. R. 1999 "Conceptualizing social identity: A new framework and evidence for the impact of different dimensions." *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 120-135.

Karasawa, M. 1991 "Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations." *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.

唐沢穣 2001 「ステレオタイプ」 山本眞理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介（共編）『社会的認知ハンドブック』 北大路書房 108-111.

Kelly, C. 1988 "Intergroup differentiation in a political context." *British Journal of Social Psychology*, 27, 319-332.

Lay, C., & Verkuyten, M. 1999 "Ethnic identity and its relation to personal self-esteem: A comparison of Canadian-born and foreign-born Chinese adolescents." *Journal of Social Psychology*, 139, 288-299.

Long, K. M., & Spears, R. 1997 "The self-esteem hypothesis revisited: Differentiation and the disaffected." In R. Spears, P. J. Oakes, N. Ellemers, & S. A. Haslam (Eds.), *The social psychology of stereotyping and group life* (pp.296-317). Oxford: Blackwell.

Long, K. M., & Spears, R. 1998 "Opposing effects of personal and collective self-esteem on interpersonal and intergroup comparisons." *European Journal of Social Psychology*, 28, 913-930.

Luhtanen, R., & Crocker, J. 1992 "A collective self-esteem scale: Self-evaluation of one's social identity." *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 302-318.

Maass, A., Ceccarelli, R., & Rubin, S. 1996 "Linguistic intergroup bias: Evidence for in-group-protective motivation." *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 512-526.

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.

Rubin, M., & Hewstone, M. 1998 "Social identity theory's self-esteem hypothesis: A review and some suggestions for clarification." *Personality and Social Psychology Review*, 2, 40-62.

Seta, C. E., & Seta, J. J. 1992 "Observers and participants in an intergroup setting." *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 629-643.

Sherman, S. J., Hamilton, D. L., & Lewis, A. C. 1999 "Perceived entitativity and the social identity value of group memberships." In D. Abrams, & M. A. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition* (pp.80-110). Oxford: Blackwell.

Smith, C. A. 1999 "I enjoy being a girl: Collective self-esteem, feminism, and attitudes toward women." *Sex Roles*, 40, 281-293.

Tajfel, H. 1982 "Social psychology of intergroup relations." *Annual Review of Psychology*, 33, 1-39.

Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. 1971 "Social categorization and intergroup behaviour." *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.

Tajfel, H., & Turner, J. C. 1986 "The social identity theory of intergroup behavior." In S. Worchel, & W. G. Austin (Eds.),

Psychology of intergroup relations (2nd Ed.,pp.7-24). Chicago: Nelson-Hall.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. 1988 "Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health." *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.

Turner, J. C. 1999 "Some current issues in research on social identity and self-categorization theories." In N. Ellemers, R. Spears, & B. Doosje (Eds.), *Social identity: Context, commitment, content* (pp.6-34). Oxford: Blackwell.

Verkuyten, M., & Lay, C. 1998 "Ethnic minority identity and psychological well-being: The mediating role of collective self-esteem." *Journal of Applied Social Psychology*, 28, 1969-1986.

A Review of Studies on Collective Self-Esteem

MATSUDA Nobuki INAMOTO Kazuko KOBAYASHI Miki
MIYANISHI Satoko MOTOYOSHI Rie FUKUI Hitoshi

Social identity theory assumes that self-concept consists of personal identity and social identity and that people strive to maintain or enhance not only personal identity but also social identity. Accordingly, it is predicted that people in certain intergroup contexts compare a group to which they belong (an ingroup) favorably with other relevant groups to which they do not belong (outgroups) because of the need for positive social identity. We reviewed previous studies that examined the relationship between positive social identity and intergroup discrimination with the Collective Self-Esteem Scale designed by Luhtanen and Crocker (1992). It was found that the empirical relationship between collective self-esteem and intergroup discrimination was not clearly established. This was thought, at least in part, to be due to some flaws of the Collective Self-Esteem Scale. We suggest that modified versions of the Collective Self-Esteem Scale or newly constructed measures of collective self-esteem are needed.